

琵琶湖には現在約45種の在来魚が生息しています。それらの大きな特徴は16種類にもよる琵琶湖・淀川水系の固有種(亜種も含む)の存在です。琵琶湖が長い歴史をもつ湖だからこそ、他では見ることのない固有種が誕生し、また古くからの種が残って固有種になったと言われています。

1. 淡水魚の宝庫、琵琶湖

現在、滋賀県には84種(亜種を含む)の魚類が生息しています。この中にはオケチバスやヌマチチブなど国内外からの外来種が含まれているため、それらを除くと元々すんでいた在来種は65種、このうち琵琶湖には約45種が生息しています。多くの淡水魚が生息している琵琶湖は全国的に見ても「淡水魚の宝庫」と言えます。

2. 琵琶湖に生息する魚類の特徴

琵琶湖の魚たちの最大の特徴は、ビワコオオナマズ(写真7-12-1)やニゴロブナ(写真7-12-2)など16種にもおよぶ固有種が存在することです。このような固有種には二つのパターンがあります。

(1) 現在の琵琶湖の環境で進化した魚類

約40万年前に成立したと言われる現在の琵琶湖において、特徴的な環境である沖合いや岩場へと移り住み、そこで独自の生活様式を獲得しながら新しい種、亜種へと進化していった種です。ビワヒガイやスゴモロコは周辺の河川に生息していた祖先種から現在の琵琶湖で進化した種であると考えられています。



写真7-12-1 ビワコオオナマズ



写真7-12-2 ニゴロブナ

(2) 長い歴史の中で琵琶湖に残った魚類

現在の琵琶湖が成立する以前から種分化が起こり、長い歴史の中で琵琶湖にのみ生き残った種です。ビワコオオナマズやゲンゴロウブナ、ワタカ(写真7-12-3)がその代表で、このような種類は「遺存固有種」と言われています。

このような固有種も産卵期には琵琶湖湖岸の植生帯や周辺にある内湖、河川、田んぼなどに移動して産卵を行ないます。そのため、琵琶湖の魚にとって、周辺にある水辺環境も重要です。また、固有種に加えて、オイカワやタナゴ類など他の地域にも広く分布している種が加わることで、琵琶湖の魚類相を豊かなものになっています。そして、種数の豊富な琵琶湖の魚は漁業や食べ物、水辺遊びの対象として私たち人間とも深く関わりを持っています。



◀写真7-12-3 ワタカ

3. 固有種を生み出す琵琶湖の歴史とその環境

琵琶湖に生息する在来種のうち、固有種が占める割合は30%以上にのびます。琵琶湖はその誕生が古琵琶湖も含めて約400万年前のものばり、世界的にも有数の古さを誇る湖です。この長い歴史と琵琶湖の特徴的な環境があったからこそ、琵琶湖の固有種、そしてその多様性が生まれてきたと考えられています。

4. 琵琶湖の魚類の現状とこれから

琵琶湖の生態系は私たち人間の行なうさまざまな活動によって過去10~20年間に大きく変わりました。特に、生息環境の破壊や生態系に影響のある外来魚の増加、琵琶湖水位の人為的調整は在来種や固有種を大きく減少させた要因と考えられています。私たちは水辺環境の復元や外来種の防除など、様々な取組を行ない、かつての豊かな琵琶湖を取り戻し、後の世代に引き継いでいくことが求められています。

琵琶湖博物館 金尾 滋史